文京学院大学人間学部研究紀要 Vol. 24, pp. 77 ～ 92, 2023. 3

地域アートプロジェクトへの学生参画の教育的意義
―G.ビースタの「主体化」概念を手がかりに―

渡辺　行野*・西田　希**・木村　浩則*

本学は，ふじみ野市と包括連携協定を締結し様々な事業を行ってきた．本研究では，その一つである「アートフェスタふじみ野」における地域アートプロジェクトに着目し，学生の地域社会への貢献や活動への参画を通してどのような学びが得られるのか，その教育的意義を理論的かつ実証的に検討することとした．

ビースタ（Gert J.J.Biesta）は近年，教育界を席巻する成果主義，測定主義の潮流を批判し，不確実性や予測不可能性，リスクなど「教育の弱さ」に光を当てており，それこそが教育を可能にする条件だと述べている．本稿では教育の主要な機能とみなす概念ともされるビースタの「主体化」概念を援用した．

調査を通して，人間の「主体性」は，教育を通じて獲得されたり操作されたりするものでは決してなく，「他者との出会い」を通じて，すなわち協働活動の中で「他者」に見られ聞かれることを通じて「現われる」ものだということが示唆された．また，参画を通して学生の自己肯定感や自信の形成に繋がったことも明らかとなった．さらに調査では，対面とオンラインの異なる参画方法による調査を行ったところ，主体性の現われにはやはりひとりではなく他者と共に取り組むことの重要性，改めて対面で活動することの意義を確認することができた．

今後の課題として，SNS等のリモートの可能性も含め，主体化の現われのプロセスを引き続き調査し，データを蓄積・分析していくことで，より重層的に学生の学びに繋がる教育を構築していく必要がある．

Key words：教育，アート，保育者養成，地域連携

はじめに

筆者らは，昨年度の本研究紀要に，地域アートプロジェクト（アートフェスタふじみ野）への学生参画の教育的意義に関する実証的研究の成果を公表した．本稿では，同様のテーマを別様の観点からアプローチすることで，当該研究のさらなる深化を試みるものである．そのアプローチとは，学外の地域貢献活動を経験することによる学生の成長を「主体化」の観点から捉えることである．「主体化」とは，後に詳しく述べるように，ガート・ビースタ（Gert J.J.Biesta）が，「資格化」，「社会化」とともに，教育の主要な機能とみなす概念である．

現代を代表する教育哲学者の一人であるビースタは，近年，教育界を席巻する成果主義，測定主義の潮流を批判し，不確実性や予測不可能性，リスクなど「教育の弱さ」に光を当て，むしろそれこそが教育を可能にする条件だと述べる．そして教育の機能の一つである「主体化」の役割に注目し，それが「あらゆる教育の本質的な構成要素であるべきだ」（Biesta 2010 p.75）と主張する．

本稿では，このビースタの「主体化」概念の内実を明らかにするとともに，その概念を手がかりに，

＊人間学部児童発達学科
＊＊目白大学

二つの大学の学生インタビューを通じて大学と地域の協働活動（アートプロジェクトへの参画）がいかに学生の主体化に貢献しえたのかを検討する．そして，その実践が現代の大学教育にどのようなインパクトをもたらしうるのかを明らかにしたい．

第１章　ビースタの「主体化」概念について

そもそも教育の目的とは何か．教育実践においてつねに熟考されるべき，この原理的な問いに対して，ビースタは，教育の目的あるいは機能として，資格化，社会化，主体化の三つの次元を挙げる．

「資格化（qualification）」とは，子ども，若者，成人に，知識，技能，理解，あるいは「何事かを為す」ために必要な判断の傾向や形式を提供することにかかわる．それには，特定の仕事や職業のための訓練のような具体的なものから，近代文化への参入や生活技術の習得のような一般的なものまで含まれる．資格化は，学校のような教育組織の主要な機能の一つである．

「社会化（socialization」は，教育を通して，我々が特定の社会的，文化的，政治的な「秩序」の一部になる方法にかかわる．社会化もまた，ある規範や価値の伝達，特定の文化的・宗教的伝統の継承，あるいは職業的社会化を目指して教育機関によって積極的に追及される．

「主体化（subjectification）」は，社会化の機能の反意語として捉えられる．社会化に対して主体化は，既存の秩序からの解放をめざす．それは単純に既存の秩序を受け入れることではなく，別様の行動の仕方や人間の在り方が可能となるような秩序の変革を目指すものである．それゆえ，ビースタは，人間の主体化を民主主義社会の発展に寄与するものとして重視する．

ビースタによれば，教育実践はつねにこの三つの次元で機能する傾向にあり，それぞれの領域に関連してその目的が問われなければならない．しかし，この三つの領域は明確に分かれているわけではない．重要なのはそれらの重なり合いである．一方でその重なりは相乗効果の機会となり，他方で衝突の機会をもたらす．それゆえ教育者には，ある次元で得られるものがある次元では損なわれるかもしれない可能性を考慮に入れた実践的判断力が求められる．

さて上記の三つの説明のうち，「資格化」と「社会化」は，大学を含む学校教育にとって馴染み深いものであり，ビースタの説明を理解するのにさほど困難はないだろう．しかし「主体化」を教育の目的とみなすことには明らかに困難が伴う．なぜなら教育によって「主体性を身につけさせる」とか，「主体的に学ばせる」といった言説には教育関係のパラドックスが潜んでいるからである．これらの言説において，生徒はあくまで教育の対象であり，教育者にとっての「客体」にすぎない．つまり統制や操作として教育を考える限り，「生徒は主体として現れることが決してできず，教育者の意図と介入の対象にとどまってしまう」のである．

それでは人間の「主体化」はいかにして可能なのか．パラドックスに陥らないためには，「主体」あるいは「主体性」をどう捉えるかが検討されなければならない．しかし，ビースタは「人間的主体性について特定の概念化をするつもりはないし，いかに主体性が『出現する』のかについて特定の理論を進展させようとしているのでもない」と述べ，概念化や理論化に対して「開かれた態度」をとる（Biesta 2014 p.18）．そのため，「主体性」あるいは「主体」は様々な仕方で論じられ，それを単一の定義をもって説明することを避けている．

そこで，以下，ビースタの複数の著書における議論をもとに，「主体性」あるいは「主体」の概念の内容を把握し，本稿の主題へとつなげていきたい．なおビースタの著書には，「主体（subject）」，「主体性（subjectivity）」，「主体であること（subject-ness）」といった言葉が登場するが，それらの意味内容が必ずしも明確に区別されていない場合があることをお断りしておく．ただし「主体化（subjectification）」については，それらが実現する過程という意味合いで捉えられている．

１．「現れ」としての主体

ビースタはまず，『教育の美しい危うさ』（初版2013）のなかで「主体性」について次のように語っている．

「それは，つねにそこにある何かでもなければ，

私たちが保持し，所有し，確信したりできる何かでもなく，ときに起こりうる，現われ出る何かである」（Biesta 2014 p.22）.

また次のようにも語る.

「主体性とは，私たちが保持したり所有したりできるものではなく，他者との出会いという，常に変化し，開かれた，予測不可能な状況で，時として実現されうるものである」（Biesta 2014 p.12）.

主体性は，他者との出会いという不確定な状況のもとで「出来事」として現われる.「出来事」とは，主体性が学習の成果でもなければ，教育によって獲得できるものでもないことを意味する．それゆえ「主体化」が実現するかどうかは教育者の手のうちにはなく，偶然に委ねられている．もし主体性の現われを統制しようとすれば，すなわちインプットとアウトプットの因果過程に基づいて操作しようとすれば，それはまったく生じないだろう．だからせいぜい教育者にできることは，「主体性」の現われを阻害しないことだけであるとビースタはいう．教育によって，主体性は生じるかもしれないし，生じないかもしれない．それが仮に起こったとしても，その結果を見通すことはできない．しかしビースタにとって，この不確実性は，教育の放棄を導くものではない．それは，教育にとって明らかなリスクだが，教育者がそのリスクを引き受けようと意志するときにのみ「主体化」という出来事は起こりうるのである.

もう一つの要点は，主体性が「他者との出会い」を通じて現われるということである．それは，主体性の現われが「他者」に見られ，聞かれることを通じて可能になるということを意味する．ビースタにとって主体は，「自我」や「アイデンティティ」として理解されるものではない．それは単独にではなく，他者との関係性を通じて現れる．よって「主体」あるいは「主体性」は，関係概念として理解されなければならない．ビースタは，それをレヴィナスの「主体」概念を参照することで明らかにしようとする.

２．「関係」としての，「応答責任」としての主体

フランスの思想家エマニュエル・レヴィナス（Emmanuel Levinas）は，自我中心主義的に捉えられてきた，近代の「主体」概念を批判し，主体はいつもすでに〈他者〉との関係性に結び付いていると論じる．それは，倫理的関係性であり，無限で無条件の〈他者〉への応答責任（responsibility）に基礎づけられた関係性である．応答責任，すなわち他者の呼びかけへの応答は，他の誰でもない私にのみ課された義務である．そしてそれは私という主体が特異で代替不可能なものであることの根拠でもある.

しかしだからといって，主体性と応答責任を混同してはならないとビースタは言う．私たちにとって応答責任は所与であるが，「私たちの主体性は，私たちがこの応答責任をどう扱うか，それにどう応じるか，・・・私たちが自分の応答責任に対する責任をどう担うかにかかわっている」からである（Biesta 2014 p.22）．応答責任は他人に押しつけるものではなく，自分で引き受けるしかないものである．だからそれは道徳教育の課題として扱うことはできない．教育者にできることは，せいぜい生徒をそうした経験から遠ざけないこと，他者の呼びかけに対して無感覚となることを助長しないことであるとビースタは述べる.

以上のように『教育の美しい危うさ』においては，教育の役割はきわめて抑制的なものであるべきことが強調される．そのため，教育を通じた人間の「主体化」はいかにして可能か，という問いに正面から答えているとは言えない．そこでビースタは『教えることの発見』（2017）において，さらに踏み込んだかたちで，この問いに向き合う．次に，この著書をもとに，「主体化」はいかにして可能か，より実践的なレベルで明らかにしていきたい.

３．主体として存在すること

この著書では，「主体化」に関する言及はほとんど見られず，その代わりに「主体として存在すること」という用語が使用されている．ビースタによれば，主体として存在することは，他なるものや他者との「対話の状態」にあることを意味する．それは，他なるものや他者に「さらされる」ことであり，他なるものや他者から「語りかけられる」こと，あるいは「教えられる」状態にあるという

ことである．また別の言い方をすれば，主体として存在することは，自己のうちに留まることではなく，むしろ自己の「外部」にあること，世界を志向して「外へ向かい」，世界のうちに「投げ出される」ことを意味する．それは，「私」が主体として存在することは，他者が，「私」の行為をどのように引き受けるのかに決定的に依存しているということである．

しかしそれは他者への単純な従属を認めるということではない．「私」が何事かを始めるとき，「私」は誰かのあるいは何かの抵抗に出会う．ビースタによれば，この抵抗はきわめて重要な経験であり，世界が自己の精神や欲望による構成物ではないということを指し示すものである．「私」は抵抗を通じて自我のまどろみから目覚め，（外部である）世界を経験するのである．

４．成長する仕方で存在すること

ビースタにとって教育の課題は，「他の人間に，世界の中に世界とともに成長した仕方で存在すること，すなわち主体として存在することの欲望を引き出す」（Biesta 2017 p.7）ことにある．

「成長した仕方で（in a grown-up way）存在する」とは，「主体として存在する」ことであり，そのためには，欲望を抑制するのではなく，自身の人生と，他者とともに生きる人生にとって，自己が欲するものが欲すべきものなのかどうかと問うことが必要である．ビースタによれば，そのとき教育者に求められるのは，何を欲すべきかを伝えることではなく，この問いとともに生きる「意欲」を引き出すことである．ではそれはいかにして可能なのだろうか．

５．「主体化」はいかにして可能か

ビースタによれば，そのために必要な教育の仕事は「中断（interruption）」「停止（suspension）」「維持（sustenance）」の三つである．まず「中断」とは，「私が主体であることに関する出来事はつねに私の内在性の中断，つまり，私自身のために，私自身とともに存在することの中断として現われることであり，まどろみからの目覚めとして現われることである」（Biesta 2017 p.17）．教育者にとってそれは，生徒の才能を発達させ，潜在能力を開花させることではまったくなく，彼らの「才能や潜在能力を一時中断させること」である。そしてそれによって，生徒は「世界の中に成長した仕方で存在すること」（つまり世界のために，世界とともに主体として存在すること）を助けるのはどのような才能で，また妨げるのはどのような才能かを問うのである．

生徒にとって望ましいことは何かを判断するのは教育者ではない．なぜなら教育者が判断する限り，生徒は「客体」にとどまったままだからである．よって，その問いはあくまで生徒自身による生きた問いでなければならない．その問いを生み出すための時間と空間を提供すること，それが「停止」である．停止すなわちいったん立ち止まることによって，生徒は自らの欲望に従属するのではなく，「何が望ましいのか」を問う主体になることができる．

さらに言えば，この「中断」や「停止」とは，中間点に留まることを意味する．ビースタによれば，教師の仕事はこの中間点に生徒がとどまるよう支援することであり，それが「維持」である．中間点とは，生徒が（他者とともにある）世界に出会う場（空間）であり，そのような場をもたらすことが教育の仕事である．しかし，世界との出会いは，「自己の中に自己とともにある世界」（私がいまだ主体として存在していない世界）を脅かすがゆえに抵抗の経験をともなう．だからこそ教育者の課題は，抵抗の経験に出会うことの意義を示し，困難な中間点にとどまろうとする欲求を生徒から引き出すことである．そうすることで，生徒は，世界の中に主体として存在するという，見通すことのできない可能性に向かうことができるのである．

６．地域アートプロジェクトの可能性

第１章において，ビースタの「主体化」概念について，必ずしも十分とは言えないが，その意味するところを明らかにしてきた．そして，いかにして「主体化」の教育は可能か，彼の考えの一部を示した．それを踏まえて，第２章，３章では，地域アートプロジェクトへの参画が「主体化」（主体性の現われ）をもたらしうるような空間を学生たちに

提供しえたのかどうか，学生へのインタビュー調査によって検証する．問われるのは，この活動を通じて，学生たちのなかに「主体性」の現われという出来事が生じたかどうか，あるいはその経験が学生たちに「自己とともにあること」から「他者とともにあること」への転換を迫るものであったか，すなわち学生たちが，世界の中に他者とともに成長した存在として現れることが可能であったかである．そのことを，地域アートプロジェクトという場において「他者」と出会い，ともに活動し，表現する過程のなかに，どのような気づきや覚醒があったかを，学生たちに振り返ってもらうことで検証したい．

第２章　地域アートプロジェクトへの取組

１．地域アートプロジェクトの概要

地域アートプロジェクト（アートフェスタふじみ野）への学生参画は，2017年度から始まった．2018・2019年度には教員の声掛けで集った有志団体が参加し，１～４年までの学生30名で構成された創作舞台を上演した．またその後のコロナ禍によるオンライン開催においても，映像等のパフォーマンスでオンデマンド配信にて参加をしている．

本稿で調査対象とする２つの演目について説明する．一つ目は，A大学の学生による創作舞台「サンタがふじみ野にやってくる」である．学生たちが自らストーリーを考え上演した．登場人物の構成や演者，映像や舞台背景等の技術，劇中の音楽や感情表現を表す音素材・BGM，演技を行う上での演劇的な要素，劇中におけるダンス等の様々な役割をメンバーで分担し，一人一人の学生の特性や特技を活かしながら総合的なパフォーマンスとして学生たちが自ら全てを創作していった．保育者・教育者における専門性を発揮できるものとして，フロアの子ども達を巻き込むアート活動となるようなホール上演を目指した．その際，台本以外のアドリブ，例えば子どもへの問いかけや受け答え，子ども達を惹きつける為の導入，子ども達を集めるシーンを設ける等，あらかじめ様々な場面を想定し，幾つもの対応を考え，それらを視野に入れながら舞台を創作・準備・練習を行っていった．二つ目は，コロナの影響によりアートフェスタが全てオンライン配信での開催となった年度のものであり，B大学のゼミ活動としての「アートフェスタふじみ野」への参加である．創作したダンスを個々の学生が実演し，一つのダンスとして融合させるという内容で，インターネット上の動画共有サービス（YouTube）により配信した．

２．研究方法

(1) 対象

地域アートプロジェクトに関わった２大学の学生を対象とする．対象者選定は研究の同意が得られた対象者から無作為に選定した．

【A大学】

研究対象者４名は，いずれも３年前の創作舞台「サンタがふじみ野にやってくる」を経験した保育者・教育者養成課程に在籍している学生２名（学部４年生）と既卒者（保育士・小学校教諭）２名である．

【B大学】

研究対象者４名は，保育者養成課程において３年生の時にゼミ活動として「アートフェスタふじみ野2020・2021（オンライン）」に参加をした既卒者２名（幼稚園教諭，大学院生）と在校生２名（大学４年生）である．

(2) 調査内容・方法

調査方法としては，半構造化インタビューを実施した．１時間を目安とし，地域アートプロジェクトへの取り組みを振り返り，地域アートプロジェクトへの参画が「主体化」（主体性の現われ）をもたらしうるような空間を学生たちに提供しえたのかどうかを検証する目的である．質問項目は以下に示す．なお，個々のインタビュー間のバイアスを減らすために全てのインタビューを同一者で行った．インタビュー調査は「Zoom」オンラインにて2022年８月後半～９月に実施した．これらの調査を行うにあたり，本調査の目的・任意回答・回答による不利益が生じないこと（本人を特定しない）・本紀要論文への投稿や報告の場で用いることを説明し，本人の同意を得た上で実施した．

対象者の同意を得て，各調査協力者には許可を

得て音声データの録音を行った.

(3) 調査の内容

ビースタの概念を参考に以下の質問項目を設定した.

【インタビュー調査の項目】

○何年前にアートフェスタに参加しましたか.

(1) 自分もしくは自分たちの発表・表現においてどのような工夫をしましたか.

(2) アートフェスタに向けて，仲間と共に活動する中では，意見の相違等，相手から自分とは違う何かを感じることはありましたか.

(3) 仲間と共に活動する場面において，苦しい時はありましたか．それはどのような場面ですか．どのように対応していきましたか.

(4) 活動を継続していく中で，自分の中にあるいは仲間との間に，新たに生まれた感覚，新しい発見や変化はありましたか.

(5) ①仲間に対して，②観客に対して，他者に向けて自分自身を表現する・さらすこと，について，どのように感じましたか．また，どのようなことを考えましたか.

(6) アートフェスタにおいて，「新しい気づきや出会い」というものがあったかと思います．それは，どのような「気づき・出会い」でしたか．自分自身へのそうした出会い（の可能性）はありましたか.

(7) 振り返ってみて，アートフェスタの経験を通して何を学びましたか.

※その他，自由なトーク

第３章　結果と考察

インタビュー調査から得た回答を整理すると下記の通りであった.

１．Ａ大学

(1) 自分もしくは自分たちの発表・表現においてどのような工夫をしましたか.

「その場にいる子どもたち向けに参加型とした」「子ども目線で，子どもに反応する」といったその場に生まれるコミュニケーションや「参加者に楽しんでほしい」「全身で表現」「笑顔で，表情で訴え」「世界観を感じてほしい」等の観客に対する表現者としての意識等がみられた．また，「周りに合わせる」「周りの様子を感じていく」等の自分たちのチームとしての関わりを大事にしている様子もうかがえた.

(2) アートフェスタに向けて，仲間と共に活動する中では，意見の相違等，相手から自分とは違う何かを感じることはありましたか.

全員が他者との相違を感じていた.「意見が違うことから板挟みとなった」「一つのことを発表するはずなのにバラバラだった」等，他者と自分との違いに苦しむ様子が見られる一方で「個性はぶつかりあっていたけど，方向性は子どもたちを楽しませることで一緒だった」「それぞれの表現や思いはバラバラに見えても，楽しませることは一緒であったし，見せ方は違うけど方向性が一緒であった」「役割によって尊敬していた」「意見が違うから何度も話し合った」等の発言があった.「結果的に楽しかった」「先輩たちの言いなりの部分もあり自分の意見すら持たなかった」等，意見の相違によるぶつかり合いがある中で，互いを尊重し合い一つの作品を仕上げようとしていた様子がうかがえる．また，学年の違いや初めての関わり合いとなる学生もいたことで，それぞれの相違や異なる立場からの関わりの中で，多くのことを感じとっていたことも分かった.

(3) 仲間と共に活動する場面において，苦しい時はありましたか．それはどのような場面ですか．どのように対応していきましたか.

「大好きな先輩から注意される悲しさや苦しさ」「本番への不安」「いつも一緒にいる仲間と別の人や気を許していない人たちとの場でもあるので億劫」「みんなの時間がそろわず練習時間が足りなかった」等の発言からは，共に活動する上での苦しさが伝わってくる．その一方で，「でも行けば楽しい」「練習で笑って楽しく過ごしていると嫌なことも忘れる」「不安になった時に誰かに頼りたくなった」「みんなでやっていると楽しかった」「みんなに会えるのも楽しかった」等，練習に行くまでの気持ちは億劫であったが，共に活動していく中で楽しい気持ちになっていたことがわかった.また，「大切な仲間に救われた」「意見の相違もな

く苦しさもなかった」「時間はなるべく作って時間も使った」という意見もあり，先輩に支えられていたことや苦しいながらも共に活動することの楽しさから準備を前向きに進めていった様子もうかがえた．

(4) 活動を継続していく中で，自分の中にあるいは仲間の間に，新たに生まれた感覚，新しい発見や変化はありましたか．

「伝え方・言い方等の人の接し方を見て自分自身に生かすようになった」「見てまねること，良い方向に導かれた，周囲の雰囲気によって変わる」「色々な人を見てそうなりたいと思ったし，そういう場に居られたことが良かった」「自分自身が楽しいと感じて表現しないと伝わらない」「自分以外から刺激を受ける・人を見て自分を磨くことを得た，それは教育現場でも関係する」「表現は笑顔が大事，やる側と見る側の立場にたてる」「自分を演じる，自分がどう見られるのかのスイッチ，現場でも同じことを感じる」「みんなで目的に向かっていく，みんな違うけど苦しい・楽しい色々な中で人と関わることによってコミュニケーション能力や協働する力が生まれた」等の肯定的な意見がたくさん見られた．

(5) ①仲間に対して，②観客に対して，他者に向けて自分自身を表現する・さらすこと，について，どのように感じましたか．また，どのようなことを考えましたか．

「観客がいることは大事，子どもたちが舞台に上がった時も楽しかった」「緊張するし責任もあるけど，観客がいたからこそ，観客の声や雰囲気でテンションが上がった」「楽しんでもらえるかの不安もあったけど，観客の雰囲気で伝わってくる」「自分という主体が誰かを喜ばせることができるということを実感した」「子どもが喜んでいたときの感覚がすごく印象に残っている」「緊張するけれど，みんなで一緒に演じていることの連帯感で不安がなくなった」「誰かに見られていると意識すると緊張するけど，だからこそ笑顔に気を付けるとか客観的に考えられた」等の発言があった．仲間や観客といった様々な他者との関わりの中で，個々の表現の変化やその場から生まれ出る表現があったのではないかと考えられる．また，活動を通して仲間との信頼関係を構築していく姿も見られた．

(6) アートフェスタにおいて，「新しい気づきや出会い」というものがあったかと思います．それは，どのような「気づき・出会い」でしたか．自分自身へのそうした出会い（の可能性）はありましたか．

「年齢の幅がある中での参加に大きな学びがあった」「表現を通して繋がることってすごい，参加者との出会いが良さである」「指導すること，全体をまとめていくことの大変さと大切さ」「キラキラする経験，達成感，やってきてよかったと思えたことの嬉しさ」「何かをすることで誰かを喜ばせることができることを知った」「今後もしていきたい，自己肯定感」「人前で演じることで自信がついた」「練習する工程，練習することの大切さ」「４年生の凄さ，台本作り，全体を動かす力，尊敬した」等の発言があった．こうした経験から，多くの気づきがあったことがうかがえる．その当時は見えなかったことや分からなかったことも時間が経過することで感じられることもあるようだ．「先輩達の労力が今は感じられる」「きっと色々なことを影で支えてくれていた」等，今振り返って気づくことがあり，時の経過とともに影響力を与える学びもあるのではないか．また，取組みを通して達成感や満足感を得られたことで，他の活動に対しても次なる一歩を踏み出すことができたことも分かった．自己肯定感が次への参画に繋がっていくのである．

(7) 振り返ってみて，アートフェスタの経験を通して何を学びましたか．

「みんなで一つのことをつくることは時間も掛かるし意見も違うし，とても大変だけど，それをどのようにまとめていくのかを学んだ」「一つの目標にみんなで創り上げていく必要があった．向き合いかたや考え方の違いがあっても目標達成に向けて頑張れた．やり遂げる力や創りあげる力を得られた．」「自分が未熟だったこともあり，今ならわかることが多い．人の前に立つこと，表現すること，人の気持ちを考えることの大切さ，全部やってみて分かったこと，経験して良かった」「どんなことも全力でやれば楽しい，面倒くさいと初めは思うけど，結局面倒臭そうにやる人は一人もいな

かった，みんな笑顔だったし必死だっただからこそ，今子どもたちにもこの経験を伝えられる，本当に楽しかった」「演じる時の笑顔や表現はその場の人々に感染する」等の肯定的な意見が見られた．取り組みの最初では意欲がなかったり不安を抱えたりしていたものの，経験を通してそれぞれが何らかのかたちで学びを深めることができたのであろう．他者と共に様々な過程を通して学ぶことの大切さがうかがえた．

２．Ｂ大学

（1）自分もしくは自分たちの発表・表現においてどのような工夫をしましたか．

「発表するダンスの振り付けを忠実に踊ることを一番意識した．」「とにかく踊れるように努力をした．」「自分だけ踊れなかったらどうしよう」など，全員から「完成したダンスを発表するために練習をした」という回答であった．発表形式であるダンスは全員で行うものであるが，自粛中ということもあり一人で練習をしなければならないという不安が強い環境から「完成させる」という意識が第一にあったということが伺えた．工夫に対しては「動きを大きく見せたり，メリハリをつけて動くこと」という意見があった．対面での発表の場合，自分の発表時の姿を確認することが困難である．しかしながら，YouTube配信では自分の姿を確認することができる．そのため「完成させた姿を披露する」という個人個人の課題を掲げ，達成できるように工夫することができた．

（2）アートフェスタに向けて，仲間と共に活動する中では，意見の相違等，相手から自分とは違う何かを感じることはありましたか．

「完全に自粛期間だったので，他の人と関わることがあまりできなかった．たまに活動が許可されたときは，話し合うというよりは確認しあうという感じだった．」「話し合いの中で意見が出た時は『そっちの方がいいね』『それもありだね』というふうに活動が進んでいった．」という回答であった．話し合いの内容は衣装，踊り方，動画編集に向けてのフォーメーション構成に関することが主だったようだが，全体で集まり話し合う機会が極端に少なかったようで，意見のやり取りの場面はなく確認作業が多かったため，意見の相違や自分と何か違うことを感じる場面はほとんど無かったと分かった．

（3）仲間と共に活動する場面において，苦しい時はありましたか．それはどのような場面ですか．どのように対応していきましたか．

苦しい場面としては「とにかく一人で活動をしていたことがきつかった．」「遠隔で一緒に練習をするのは無理だったので，ただ見本の動画を繰り返して練習をしていた．」の回答がでた．対応としては「動画を送って共有をしたり，意見をもらったりして連絡をとった．」があげられた．コロナ禍で自粛期間中の活動だったため，共に活動をする場面が撮影時のみだった．そのため，共に活動することの苦しさより，一人で取り組むことの苦しさが前面に出たと考えられる．

（4）活動を継続していく中で，自分の中にあるいは仲間との間に，新たに生まれた感覚，新しい発見や変化はありましたか．

「仲が深まった．」という回答が全員から得られた．「Zoom等でのやり取りばかりだったが，撮影の日は１日中みんなで一緒にいて，踊ったり撮影をしていて，終わった時は達成感があった．」「仲が深まったのは，一緒にいる時間が長かったり，教えあったりしたことがきっかけかもしれない．」と対面でも活動場面が多くあげられた．自分自身の変化については「今までは連絡事項くらいしかやり取りをしていなかったが，それ以外でもやり取りをするようになった．きっかけを辿るとやっぱりアートフェスタかなと思った．」という回答があった．撮影日だけであったが，協力し，一つの作品を作り上げたことは，仲間との一体感を得て達成感を得たようである．

（5）①仲間に対して，②観客に対して，他者に向けて自分自身を表現する・さらすこと，について，どう感じましたか．またどのようなことを考えましたか．

仲間に対して「とにかく本当に恥ずかしかった．だから練習した．」の回答があった．YouTubeで他者に向けて自分自身が配信をされることに対して「抵抗が無かった」という回答がほとんどであった．「楽しかったしやり切った感があったので，作品に

自信があったので見てほしかった．もしゼミだけの発表だけでは物足りなく感じたと思う．YouTubeに配信をしてみてほしかった.」「納得をいっていないダンスだったら『早く消してほしい』と思うが，納得する作品だったので『出てるんだな』という実感はあった.」「恥ずかしい気持ちもあったけど，見てくれたことが嬉しかった」等の回答があった．仲間や見えない観客に対し，完成した自分の姿を自信をもってさらすことが喜びにつながったようである.「ゼミ活動だけの発表だけでは物足りなかった.」という発言から，YouTubeに公開され多くの人に見られたことで承認欲求が満たされたと考えられる.

(6) アートフェスタにおいてどのような「気付き・出会い」がありましたか．自分自身へのそうした出会い（の可能性）はありましたか.

大学生活が自粛中での活動，YouTube配信ということから「出会いについてはよく分からない」という回答がほとんどだった．やはりコロナ禍でかつ自粛を強いられている状況で新しい出会いを感じることは難しかったようである．さらにゼミ活動だったため「新しい出会いとは感じられない」とのことだった.「気づき」について「コロナ禍で大学生活も自粛で，何も授業すら対面で出来ない中で，唯一の思い出作りになった.」との回答もあった．また「アートフェスタの経験が人前に出ることに対して，少し慣れてきたように思っている.」「どんな行事でもなかなか自分から参加をする人は少ないと思う．行事というのは段々と完成に近づいて完成して達成感を得る．始めるきっかけを掴むことが難しいと思うので『やらされてる』から始めてもいいと思う.」との回答もあった.

(7) 今，振り返ってみて，アートフェスタの経験を通して何を学びましたか.

「自粛で遠隔だけの生活のなかで，対面での楽しめる時間が過ごせた．大学3.4年生の２年間登校もせず，自粛の人が多い中で，アートフェスタのおかげで人が直接会う必要さを知った.」「諦めないで繰り返し練習をしたりしたら，いいものができる.『辛いな』と思ってもあとから見返した時にいい思い出になっていることもあったりする.」等の回答があった．全員の回答から，まずはアートフェスタに参加をしたことによって，短期間ではあっても対面で活動をする喜びを実感したようである．個人で活動が多かった中でも仲間と双方のつながりを保ちながら，最後まであきらめずに完成させたということが，かれらの自信の形成に繋がったと考えられる．また「社会人になって，アートフェスタのことを思い返してみると，その時は『なんでやんなきゃいけないんだろう』と思っても『やっといてよかった』と思えたりしたから，面倒と思う時があっても後々のことを考えて今やらなくてはいけないと思えるようになった.」との社会人対象者からの回答があった．今回の取り組みは，半ば教師からの強制ではあったが，それが，ビーストの言う「中断」として，自己を世界にひらく契機となったのではないか.

３．考察

本稿の課題は，ビースタの「主体化」概念の内実を明らかにすると同時に，その概念を手がかりに，地域アートプロジェクトへの参画がいかに学生の主体化に貢献しえたのかを検討することであった．その結果，明らかになったのは，第一に，人間の「主体性」は，教育を通じて獲得されたり，操作されたりするものでは決してなく，「他者との出会い」を通じて，すなわち協働活動の中で「他者」に見られ，聞かれることを通じて，「現われる」ものだということである.

そのことは，本研究の調査結果から，例えば，「個性はぶつかり合っていたけれど，方向性は子供達を楽しませることで一緒だった」「それぞれの表現や思いはバラバラに見えても，楽しませることは一緒であったし，見せ方は違うけれど方向性は一緒であった」「意見が違うかたと何度も話し合った」等の学生の発言からも読み取ることができる.

それぞれの参加者は，異なる他者や相違する場面に出会い，自分と異なる他者と関わり，一つのものを創り上げていく過程で，意見の相違やぶつかり合いなどの困難さ，苦労を経験したようだ．しかしその中でも，「みんなで同じ目的に向かっていく」「みんな苦しい・楽しい色々な中で人と関わることによってコミュニケーション能力や協働する力が生まれた」などの肯定的な意見が見出され，

学生たちが互いを尊重し合いながら一つの作品を仕上げようとしていたことが分かる．また参画した学生たちが，それぞれに異質性をもつ集団の中で何をすべきなのか，どのように取り組むべきなのか，自己を見つめ，一人ひとり考えながら行動していったことがうかがえる．

地域アートプロジェクトという活動の場は，ビースタの言う「生徒が（他者とともにある）世界に出会う場（空間）」と捉えることができる．そこで学生たちは「世界との出会い」を経験するのだが，その出会いは，私がいまだ主体として存在していない世界（ビースタの言う「自己の中に自己とともにある世界」）を脅かすがゆえに抵抗の経験をともなう．しかし彼らは，抵抗の経験に出会いつつも，その中での活動の意義を見出すことができた．それは「緊張するし，責任もあるけど，観客がいたからこそ，観客の声や雰囲気でテンションが上がった」「誰かを喜ばせることができることを実感した」等の発言に見出すことができる．

また，本調査は二つの大学で実施したが，その比較から，主体性の現われにはやはりひとりではなく他者と共に取り組むことが重要であり，改めて対面で活動することの意義を確認することができた．

A大学のリアルな対面実施に対して，B大学はリモート実施であったが，学生からは「一人で練習をしなければならないという不安」「一人での活動は厳しかった」「他者とのやり取りがなかったことの不安」等が挙げられていた．また唯一「対面で行われた１日は重要であった」という発言もあった．主体性の現われにおいて重要なのは，対面での他者との関わりや活動であることが示唆されたわけだが，ではSNSなどのリモートによる協働活動には，「主体化」の契機は存在しないのだろうか．それは今後の検討課題としたい．

おわりに

ビースタは，現代の教育の在り方を次のように鋭く批判する．

「教育的な道，すなわちのろく，けわしく，いらだつ，いうならば，弱い道は，この性急な社会においては，なじみやすい道ではない．しかし，長い目で見れば，それは，唯一の持続可能な道となるだろう．というのも，だれもが知っているように，人間の行動や思考のすべてを全面的に統制しようとするシステムは，結局，それ自体の重さで崩壊するからである」（Biesta 2014 p.4）

「教育の質保証」や「学修成果の可視化」をはじめ，大学教育の現場には，ビースタの言う「教育を強く，確実で，予測可能で，リスクフリーにしたいと願う試み」が深く浸透している．我々は，それに強い違和感を持つ一方で，ビースタの警句に深く共感する．なぜなら教育という営みは「のろく，けわしく，いらだつ」プロセス以外の何物でもないからである．本研究を，この「教育の弱い道」をひらく一つの試みとして読み取っていただければ幸いである．

〈引用文献〉

Biesta,G.J.J.（2010）.*Good Education in an Age of Measurement: Ethics, Politics, Democracy.* Paradigm Publishers.（ビースタ，G.J.J.　藤井啓之・玉木博章訳（2016）．よい教育とはなにか　白澤社）

Biesta, G.J.J.（2014）.*The Beautiful Risk of Education.* Paradigm Publishers.（ビースタ，G.J.J.　田中智志・小玉重夫監訳（2021）．教育の美しい危うさ　東京大学出版会）

Biesta, G.J.J.（2017）. *The Rediscovery of Teaching*. Routledge.（ビースタ，G.J.J.　上野正道監訳（2018）．教えることの再発見　東京大学出版会）

〈参考文献〉

渡辺行野・西田希・木村浩則（2022）．地域アートプロジェクトへの参画を通じた学生の変容的学び―「アートフェスタふじみ野」の事例を手がかりに―文京学院大学人間学部研究紀要，Vol.23. 149-170.

（2022.9.27受稿，2022.10.26受理）

資料１．【インタビュー調査①】 2022.8.23〈ZOOMにて〉

インタビュー対象者：社会人１年目（小学校教諭A・保育士B）２名／学部４年生２名（C・D）

１．何年前にアートフェスタに参加しましたか。

３年前に参加　A・B：当時２年生　C・D：当時１年生

２．自分もしくは自分たちの発表・表現においてどのような工夫をしましたか。

A： 主役子ども向けにした。参加型・子どもへの喋り方や子供目線で楽しくできるように，子どもに反応するように意識した。
周りに合わせることを工夫した。知らない先輩との関わりがあったので，みんながひとつになるように合わせようとした。

B： ダンスだったので，ディズニーの世界観・冬の季節を子供達に感じてもらえるようにした。
身体全体で踊る・表情で訴えていくことに意識した。にこにこすることも。

C： 役割としてはピアノでパプリカを弾いた。とにかく参加者に楽しんでほしかった。CNと同じで楽しんでもらいたいから。曲の入り方とか，みんなで行うと難しいのでタイミングを合わせたりした。
複数で合奏する部分で，ピアノ，他の楽器が埋没しないように，周りの人たちの様子を感じていくことを意識した。タッチの具合も考えた。

D： 笑顔で踊った。大きく分かりやすくした。間違えてもそのまま頑張った。大きく動かすようにした。

３．アートフェスタに向けて，仲間と共に活動する中では，意見の相違等，相手から自分とは違う何かを感じることはありましたか。

全員： あった

A： でもダンスの人たちはなかったかな。CN以外の人たちの雰囲気が違うので戸惑いがあった。
役割によって色々な意見が違うことから，板挟みとなって辛かった。一つのことを発表するはずなのに，バラバラだった。
一体感みたいなのは最初なかった。個性がぶつかり合っていたけれど，みんなの方向性としては子供たちを楽しませたかったのだと思う。
最初，思いとかはバラバラでそれぞれの表現もバラバラだった。でも楽しませることは一緒，見せ方は違うけど，でも方向性は良かった。
普通に踊るのと，表現を入れて踊るのとは全く違う。だから，役割によっては他の人たちを尊敬していた。そういった違いも感じた。

B： 先輩との違いに困った。でもその当時は，まだ周りに合わせることに気が付いていなかったことと，今は分かる。その大切さも。

C： 入り方をどうするか，意見が違うから何度も話し合った。やってみると合わないことが多い。その人によって，入る場所のタイミングが違う。
やりながら考えていった。何度も合わせた。

D： ついて行こうと素直に思った。縦の繋がりがあったので，自分の意見を持つことはなかったのかも知れない。
CNの仲間は楽しくやろう！みたいな感じでいたけど，他の人たちは真面目な雰囲気もあってノリが違かった。
でも私は楽しかった。どう表現しようか工夫しようかとか，楽しかったし，逆に自分の考えすら持たなかった。先輩たちの言いなりではあった。

４．仲間と共に活動する場面において，苦しい時はありましたか。それはどのような場面ですか。どのように対応していきましたか。

全員： あった。

A： 練習時間が苦しかった。集合・日程や時間が合わなかったので。やったら楽しいけど，それまでの過程が。みんなの時間も揃わなかった。
やりたいな。と思っても練習できないとかが多くて，でも時間が足りなかったときは，別に時間をつくって練習した。
やったらやったで楽しかったし，みんなに会えるのも楽しかった。練習時間はしっかり確保したし，時間も使った。

最終的に良かった。

B： 先輩から言われる時は辛かった。特に大好きな先輩から注意とか言われる悲しさ・苦しさがあった。
苦しいことがあったかも知れないけど，でも振り返ると笑ったり楽しかったりだった。過ごしていると嫌なことも忘れてしまう。
だから嫌なこととか苦しいこととか，結局はなかったかなと。大好きな仲間にも救われた。
行けば楽しい。でも自分とは別の人たち，気を許していない人たちも居るから，行くまでは億劫だったけど，楽しかった。

C： 当日ミスったらどうしようという苦しさが常にあった。本番への不安や焦りの苦しさ。
個人で練習することが多いかったから，このやり方で良いのかとかたまに他の人を頼りたくなった。みんなで合わせる時に修正していった。

D： 先輩が先輩たちに怒られていたことすら知らなかった。何も知らなかったことがあった。苦しいと感じさせないようにしてくれた先輩。
そういう先輩も居たから，自分は苦しいと思わなかったことが分かった。だから意見の相違もなかったし，でもそれも先輩のお陰だと思った。
ダンスは得意ではなかったけど，楽しくやろうって言われたから練習も楽しめた。

5．活動を継続していく中で，自分の中にあるいは仲間との間に，新たに生まれた感覚，新しい発見や変化はありましたか。

A： 他の演目を見た時に，刺激された。そういう場にいられたことで，大人が表現することや色々な人が活躍している姿を見て，楽しそうだと思ったし，そうなりたい。と思った。他の人たちを見て，表現に余裕があるということがすごいと思った。
人を見て，自分自身に活かしていきたいと感じた。楽しいと心から表現しないと伝わらないことも分かった。見ている人も楽しくなる。
自分が疲れているはずなのに，自分以外から刺激された。人を見て自分を磨くことを得た。それは今の現場にも関係している。
表現するときは笑顔が大事。やる側と見る側の立場にたてる。表現って伝わってしまう。分かってしまう。
表現する時の自分，自分を演じる，って現場でも同じだと感じる。自分がどう見られるのかのスイッチ。すごく発見したし沢山のこと気付いた。

B： 伝え方，全体への伝え方とか，先輩達の言い方がきつかった。そういう人を見て，接し方を考えた。全体に指示を出す時にはこうしようとか自分自身に生かすようにした。CNのリーダーになった時にはそれを活かした。
友達に見てもらうことで，知っている人にみてもらうこととは別で色々なことに気付く。知らない人に発表することで，どのような表現をしていけば良いか考えた。そしてそれができることも分かった。

C： 悪いところは見習わないこと。みんなで目的に向かっていくことの大事さ。みんな違うけど苦しいけど，でも楽しいとか色々な思いがある。

D： 良い方向に導かれた。見てまねることとか，周りの雰囲気によって自分も変わる。色々な人と関わることによって，コミュニケーション能力・協働する力が生まれた。生きる力を得た。

6．①仲間に対して，②観客に対して，他者に向けて自分自身を表現する・さらすこと，について，どう感じましたか。またどのようなことを考えましたか。

A： 観客がいることは大事。子どもたちが舞台に上がってきた時も楽しかった。伝える人が多いことは大事。観客がいたからこそ，テンションが上がった。聴こえてきた観客の声や雰囲気，聴いてくれる存在は大事だと思う。演じること，さらすこと，人が多い方がしやすい。緊張するし責任もあるけど。その当時は学生だったし，でも子ども相手のプロを育てているって思って不安もありつつも安心感もあった。それは，信頼関係，仲間同士の関係性もあるかな。

B： ダンスも観客とか友達がいることで安心する。最初は不安もあるけど，観客が自分自身に応援してくれることは楽しい演技にも繋がる。
楽しんでもらえるかの不安もあったけど，舞台に立つと思うけど，観客との雰囲気で分かる。そこで色々な表現も変わる。

C： 自分という主体が誰かを喜ばせることができるということを実感した。子どもが喜んでいた時，その時の感覚がすごく印象に残っている。
さらすということ，でも主役は子供，自分を表現することで子供が喜んでもらえることしか考えていなかったからネガティブさもでなかった。
緊張はあったけど，始まったら平気だった。

D： 知らない人たちに発表することは緊張する。でもみんなで一緒に演じている連帯感みたいなものがあった。目を合わせるなどのやりとりで繋がっている感じがした。恥ずかしさや不安を感じることはなかった。責任とか舞台に立つことの緊張はある。でも，誰かに見られているということを意識すると緊張するけど，それがあるからこそ，笑顔でいたし，気を付けながらできた。客観性を持てた。

7．アートフェスタにおいて「新しい気づきや出会い」というものがあったかと思います。
それは，どのような「気付き・出会い」でしたか。自分自身へのそうした出会い（の可能性）はありましたか。

A： 年齢の壁を超えた出会い。表現は若い人という考えがあったけど，周囲の表現，大人でも表現できるのかと気が付いた。年齢の幅がある中で多くの学び，気づきがあった。１日表現を通して繋がることって凄いこと。参加者との出会いに価値がある。歳をとっても楽しそうでいいなと思った。フェスティバルの良さがある。演じることや音楽が好きだと感じた。台本作りとか４年生の凄さを知ったし尊敬した。みんなそれぞれが凄いと感じた。そういう意味でも指導することの大変さや全体をまとめていく力を学んだと思う。

B： これをきっかけにディズニーのキャストとかしたいと思った。人前で踊ることの楽しさや経験ができたことの大切さを感じた。
楽しめるための構成とかテーマって大事。アートフェスタの経験は自分の中ではキラキラする経験だった。全体を見るということは視野を広く持つ必要があったと分かった。

C： 達成感があった。やってきたことが認められたことの嬉しさがあったし，何かをやることで誰かを喜ばすことができるのだということを知った。
今後も自分にできることはしたいと思った。そういう思いにより一層強くしてくれたのがアートフェスタだった。自己肯定感。

D： 人前で演じることで，自信がついた。知らない人に対して発表する為に練習行程を学んだ。練習することの大切さ，それは自信に繋がった。

8．振り返ってみて，アートフェスタの経験を通して何を学びましたか。

A： どんなことも全力でやれば楽しい。やる時の最初は面倒くさい。でも結局それを面倒臭そうにやる人はいなかった。みんな笑顔だったし，みんな必死だった。やって良かったと思える。全力で取り組むことの大切さを学んだ。それを子ども達にも今，伝えている。本当に楽しかった。

B： 役割によってやることは別々でも，みんなが成功させたいという気持ちがあった。舞台を成功させようとする気持ち，一つに向かうことの大切さを学んだ。そしてあの頃の自分が未熟だったことが今分かる。アートフェスタは，やって損はなかったし，やってみて良かった。
こういう経験が大事だと思う。表現すること，人の前に立つこと，人の気持ちを考えることの大切さを知った。

C： イベントって，ひとつの目標に向かってみんなで創り上げていく必要がある。やり方，向かい方，それぞれの考え方の違いがあるけれど，最後は目標達成に向けて，みんなで頑張れたから，やり遂げる力や創りあげる力を得られた気がする。

D： みんなで一つのことを創ることは時間が掛かるし，意見も違うからすぐに尊重できるわけではない。でも，それをどうやってまとめていくか，どうまとめて，みんなの意見を取り入れていくか進めていくか，ということを先輩達から学んだ。
演じる時の笑顔が大事。誰かと目が合うと笑顔になるし，感染する。だから何か表現する際には，笑顔が大事だし笑顔は欠かせない。

9．その他，自由に。

A： 授業で演じるスイッチとか授業での教師の表現に活きている。授業の面白さ，指導力，スイッチの切り替えとかにはまさに役立っている。

演じることは授業と一緒だとも思う。表現力の大切さや関わり方，表現の豊かさ，現場で使う力を学んだ。経験は必要，無駄なことはないし，今現場で一番感じるのは表現力が大事だということ。

B：子どもの前で踊ることは自信に繋がった。立ち振る舞い，表現をハッキリすること，表現力，伝え方等，子どもの前で表現する経験は今の職場で活きている。我慢する力も得た。人前で演じるからこそ，本当は出したかった感情とかも自分の中で処理をしてからとかできるようになった。

C：協力する力って大事。違うことから学ぶことができたし，社会を感じた。違う人が多くいる中での集団で頑張る力，それは支え合う力でもある。

振返れば，学生のうちはないのかも知れない。埼玉県のセミナー活動の一環で，子ども達のお泊りのお手伝いとか，人間関係づくりプロジェクトとかレクとかがあるけれど，みんな率先して動かす経験をしていないことが分かる。だから，リーダー的な存在も居ないし，アドリブの力もなく柔軟性のない人達が多い。遊びがないし知らない人たちと関わる力もない。そういう意味で，自分は色々な経験をしてきたから良かったと思える。アートフェスタの経験って普通はないのかと思うと，そこでの経験は自分にとっても大きかった。

D：子どもの前で踊ることは自信に繋がった。表現をハッキリすることとか表現力が身に付いた。

資料２．【インタビュー調査②】2022.8.18-28〈ZOOMにて〉

インタビュー対象者：学部４年生２名（E・F）／社会人１年目（幼稚園教諭G）／大学院１年生H

１．何年前にアートフェスタに参加しましたか。

E・F：学部３年／１年前　現在：学部４年生　G：学部３年／２年前　現在社会人１年目
H：学部３年／２年前　大学院１年生

２．自分もしくは自分たちの発表・表現においてどのような工夫をしましたか。

E： 発表するダンスの振り付けを忠実に踊ることを一番意識した。動きを大きく見せたり，メリハリをつけて動くことを私なりに工夫をした。振り付け通りに動けない部分については，動きを自分なりに考えて踊った。
F： １か月間の練習の中で「自分だけ踊れなかったらどうしよう」と思った。コロナ禍の自粛中だったのでzoomで合わせたりとか，出来る子に聞いたりとかした。とにかく踊れるように練習をして努力をした。
G： 工夫をしたところは，コロナで完全に自宅で自粛期間で，家でどのように体を動かしたらいいか努力をしていた。
H： とにかく自分はダンスが苦手だったので，とにかく踊れるように努力をした。

３．アートフェスタに向けて，仲間と共に活動する中で，意見の相違等，相手から自分とは違う何かを感じることはありましたか。

E： 踊りや衣装について話し合った。活動の中で「こっちの方がいいんじゃない？」という意見に対して，違った意見などもなかったので，相手から違う何かを感じることは全くなかった。「そっちの方がいいね」「それもありだね」というふうに活動が進んだ。
F： とにかく踊れるようになることが第一だったが，この活動では意見の相違や自分と何か違うことを感じることはなかった。
G： 完全に自粛期間だったので，たまに活動が許可されて，みんなで活動をしたとき，話し合うというよりは確認しあうという感じだった。ダンス経験者の子に対して「上手いな」みたいに自分と違う何かを感じたことはあって，その子を真似するようにはした。
H： 話すことが増えたくらい。自分とは何かを違うと考える以前に，全て相手の意見に従っていた。

４．仲間と共に活動する場面において，苦しい時はありましたか。それはどのような場面ですか。どのように対応していきましたか。
それはどのような場面ですか。どのように対応していきましたか。

E： 全くない。仮に何をするにも人任せだったり，意見も出なかったら揉めていたかもしれないが，ゼミ活動だったせいか全くそういうことは無かった。
F： 10人の予定がどうしても合わない時は活動を動画に撮って「ここまで進んだよ」とか送って共有するようにした。活動を休むことを申し訳ないと思ったり，活動に来づらくならないように工夫をした。
G： とにかく一人で活動をしていたことがきつかった。ひたすら一人で練習をしていて，ただ見本の動画を繰り返してみて練習していた。遠隔で一緒に行うのは無理がありそうだったので，特に関わろうとはせず，一人で活動をしていた。
H： 基本的に女子同士のグループに男子が入って，例え話し合いに入ったとしても意見が変わることはまずないと思う。ただ，このアートフェスタの活動ではゼミ生同士ということもあってもめることはなかったので，苦しい時は一切なかった。

５．活動を継続していく中で，自分の中にあるいは仲間との間に，新たに生まれた感覚，新しい発見や変化はありましたか。

E： 仲が深まったと思う。撮影の日は１日中みんなで一緒にいて，終わった時は達成感みたいなのがあった。
F： 仲が深まったと思う。一緒にいる時間が長かったり，教えあったりしたことがきっかけかもしれない。
G： アートフェスタに参加をすることになって深い関りが持てた。仲良くなれた。今までは連絡事項くらいしかやり取りをしていなかったけれど，それ以外でもやり取りをするようになった。

6．①仲間に対して，②観客に対して，他者に向けて自分自身を表現する・さらすこと，について，どう感じましたか。またどのようなことを考えましたか。

E： 練習もしたし，ちゃんと完成した作品だったので「YouTubeに載った」という満足感があった。初めから「YouTubeに配信する」と言われていたので準備をきちんとして，誰がみても恥ずかしくない作品だったので，見てほしかった。

F： YouTube配信をすることに対して抵抗はなかった。楽しかったしやり切った感があったので，作品に自信があったので見てほしかった。とにかく作品にすごく自信があったので，もしゼミだけの発表だけでは物足りなく感じたと思う。YouTubeに配信をしてみてほしかった。恥ずかしい気持ちもあったけど，見てくれたことが嬉しかった。

G： YouTubeに配信をすることに対しては何とも思わなかった。納得をいっていないダンスだったら「早く消してほしい」と思うが，納得する作品だったので「見て」とは思わなかったが「出てるんだな」という実感はあった。

H： とにかく本当に恥ずかしかった。どう見られているか分からないし。だから練習して，だんだん覚えていって踊れるようになったので，YouTube配信だったが人前で自分をさらすことの自信に繋がった気がする。

7．アートフェスタにおいて「新しい気づきや出会い」というものがあったかと思います。それは，どのような「気付き・出会い」でしたか。自分自身へのそうした出会い（の可能性）はありましたか。

E： アートフェスタへの参加がオンデマンドで見ている人と会うわけでもなく，ゼミ生との活動だったので，新しい気づきや出会いは感じられなかった。動画をみて「ツナギ」と「繋ぐ」がうまく繋がっていて驚いた。

F： YouTube配信なので「出会い」とかは特によくわからない。

G： YouTubeって意外と見てくれている人がいるんだと思った。わたし的にはコロナ禍で大学生活も自粛で，何も授業すら対面で出来ない中で，唯一の思い出作りになった。ゼミ生以外に新しい出会いは分からない。

H： アートフェスタの経験が人前に出ることに対して，少し慣れてきたように思っている。新しい出会いというよりは「話せるようになった」ことが新しい変化。

8．今，振り返ってみて，アートフェスタの経験を通して何を学びましたか。

E： とにかく楽しかったし，やり切った感があった。コロナの時期で授業もずっと遠隔で，唯一の対面でのゼミ活動だった。

F： 終わった時は「終わっちゃったんだな」という悲しい気持ちと「みんなで作り上げた」という達成感の両方があった。

G： 諦めないで繰り返し練習をしたりしたら，いいものができる。「辛いな」と思っててもあとから見返した時にいい思い出になっていることもあったりする。「やっといて無駄なことでは無かった」が社会人としての経験に繋がると思う。

H： 自粛で遠隔だけの生活のなかで，対面での楽しめる時間が過ごせた。大学の同級生で2年間登校もせず，自粛の人が多い中で，自分はアートフェスタのおかげで人が直接会う必要さを知った。参加をして後悔のない行事だった。

9．その他，自由に。

E： アートフェスタに参加をすることになって，とにかく一生懸命練習をした。そのあとに学科特別行事があって参加をしたかったんだけど就活があったので諦めた。ゼミ活動だったのでモチベーションが同じくらいの子が集まっているから，活動はスムーズにいったと思う。動くこととか人前にでる子が好きな子が集まるゼミだから。またこういう機会があったら参加をしたい。

F： 今回のアートフェスタみたいなことを保育現場でやることによって，普段あんまり意欲的に遊ばない子でも楽しいと思うきっかけになると思う。その姿を保護者にみてもらうことによって子どもの成長とかも見られると思うし，いいんじゃないかと思う。

G： 社会人になって，アートフェスタのことを思い返してみると，その時は「なんでやんなきゃいけないんだろう」と思っても「やっといてよかった」と思えたりしたから，面倒と思う時があってものちのちのことを考えて今やらなくてはいけないと思えるようになった。

H： どんな行事でも，なかなか自分から参加をする人は少ないと思う。行事というのは段々と完成に近づいて，完成して達成感を得るわけで。最初はグズグズ思っていても，最後は目がキラキラになる。きっかけはある程度「強制」でもいいんじゃないかと思う。始めるきっかけを掴むことが難しいと思うので，「やらされてる」から始めてもいいと思う。